

「ぽぽあ♥まあむの
処女もらっついで」

まあむ♥
実娘

「パパとエッチなんて
絶対ヘンだもん!!」

怪しい壺を買ったら
処女の奥さんができたから
産まれた娘の処女ももらって
えっちできたお話

【あらあら】

少し前…

俺は街をブラブラしている時に
怪しい少女に声をかけられ
怪しい壺を買ってしまった。

そして、怪しい壺の怪しい力で

目覚めた時には

怪しい少女が部屋に出現。

怪しいままに怪しいセックスをして

都合のいい幸せを掴む…。

という、なんとも怪しい展開を迎え

魔法使い直前童貞だった俺は

怪しいままに人生が180度変わったのである。



まゆりっ…!!

膣内に射精すぞっ!!

「はあ...はあ...んんっ♡
今日もいっぱい出たね
あ・な・た♡」

「まゆりのまんこは
何百回中出ししても
全く飽きないからなあ...」

まゆりがまんこから
俺の精子をどろどろと垂らしながら
ニッコリと笑いかけてくれる。



「ママーっ」

もう朝だよ、って…

もーっ!! またエッチしてる!!」

ガチャ

二人で重なって
絶頂の余韻を感じていると
俺達の娘が部屋のドアを開けた。

「あらー、もう

そんな時間ー?」

はっ♡♡

はっ♡♡

ド

♡…♡♡♡



「まーちゃんもパパとエッチする？
おちんちん挿入れてもらおうと
とっでも気持ちいいよー？」

まゆりが娘に向かって
とんでもないことを言う。
。。いや、したいけどね。

「パパはいつでも
大歓迎だぞおっ!!」

「じ、しないもん!!
パパとエッチなんてヘンだもん!!」

娘が顔を真っ赤にして
バタバタと出ていってしまった。



「もー、まーちゃんったら私の娘だつてのに素直じゃないなあ」

「もうエッチしても大丈夫な体なのになあ」

「ま、仕方ないねー」

「まーちゃんが素直になるまではまゆりとエッチしましょ♡
あ・な・た♡」

夜通し続けたにも拘わらず俺達は再びセックスを始めるのであった……

ド

□…♡

はあっ

はあっ

もう……
なんなの……っ

「パパもママも毎日毎日

エッチばかり!!

ママのアホ! パパのアホ!」

街で叫ぶのは娘の「まあむ」

毎日毎日両親のセックスを

見せつけられている、思春期の少女である。

「なにが、まーちゃんもする?よ!

。。。まあむはパパとエッチなんて。。。

パパとエッチなんて。。。」

文句を言いつつも

熱を帯びた下半身を自覚すると

言葉も小さくなっていく。



「壺ー、幸せの壺ー」
壺いりませんかー？」

街の雑踏の中から
へんな売り文句が聞こえるが
まあむの頭には入らない。

（エッチ…気持ちいいのかな…
ママとっても幸せそうだし…）

（でもでも…お友達の誰も
パパとエッチなんておかしいうて
言ってたし…）



「壺ー、壺ー」

あなたを幸せにする
素敵な壺ですよー!!」

「パパとエッチ…」

「パパとおちんちん…」

下を向いたまま歩くまあむは
目の前の少女に気づかず…

「今ならお得です」

う〇い棒が5本ついてきまーす
味も3種類の中から選べまーす」

ふっと気づいた時には遅く
目の前には壺売りの少女が…

「ぎゃつ!!」



「す、すみませんっ、お客様！
…っで、…おっ？」

「ぎゅうう…」

バランスを崩して倒れたまあむは
そのままふわーっ意識が落ちていった。



「おーい、『ミラ
いい加減に目一覚ませや』」

ぺちんぺちんと頬を叩かれる感触で
まあむの意識が戻って来る。

「ごちとら警察や救急はマズいんだよ
面倒ごとになる前に目覚まさんかーい」

「ん…ん…ん…」



「やっと起きたかガキ」

「あ…さっきのヘンな子…」

目の前には小柄な少女。
外見的に自分と比べて
そんなに年も変わらないだろうと思う。

「ご、ごめんね」

「ポーっとしてて」

「なにタメ口聞いとんじやポケガキが
こちらら 歳だぞコラ
ガキが人様の商売邪魔しといて
ちゃんと謝罪せんかい」

（怖い人だった…!!）

「うーかお前、まゆりんとこのガキたる
なんか見たことあるぞ
田舎っぼい名前してたよな確か」

「ママを知ってるの…?」

「おう、だからまあ…
ぶつかった件は許してやるよ」

「う、うん…ありがとう
……ごさいます」

「んで、ポケーつと歩いてどうしたんよ
人生経験豊富な先輩が
人生の悩み相談くらいしてやるぞ」

「え、ええ…」

そして、なし崩しに
今朝の、というか最近の悩みを
相談することになるのであった…。

「したいならすればいいだろ」

セックスくらい

穴と棒があるんだから」

「だ、だって」

娘とパパがエッチなんておかしいでしょ
そんなのどこのお家もしてないよっ」

「おまえんちはおまえんちだろ」

そもそも壺の力で……ってこれはアレか」

「……と、とにかく」

パパとエッチするなんてヘンだよ
パパのことは大好きだけどっ……」

「あのなあ、よく聞けよ」

「いいか、お前のまんこは何の為にあるんだ？

本当に望む現実から逃げる為か？

誰かが決めたルールに屈する為か？

違うだろ……っ!!」

「お前はお前自身を生きるんだ!!

まんこの意味……よく考える……!!」

「まんこの……意味……」



「私…本当は

パパとエッチしたいっ!!」

まあむが叫ぶ。

「そうだ、それでこそまんこだ!!」

お前は自由のまんこになるんだ!!」

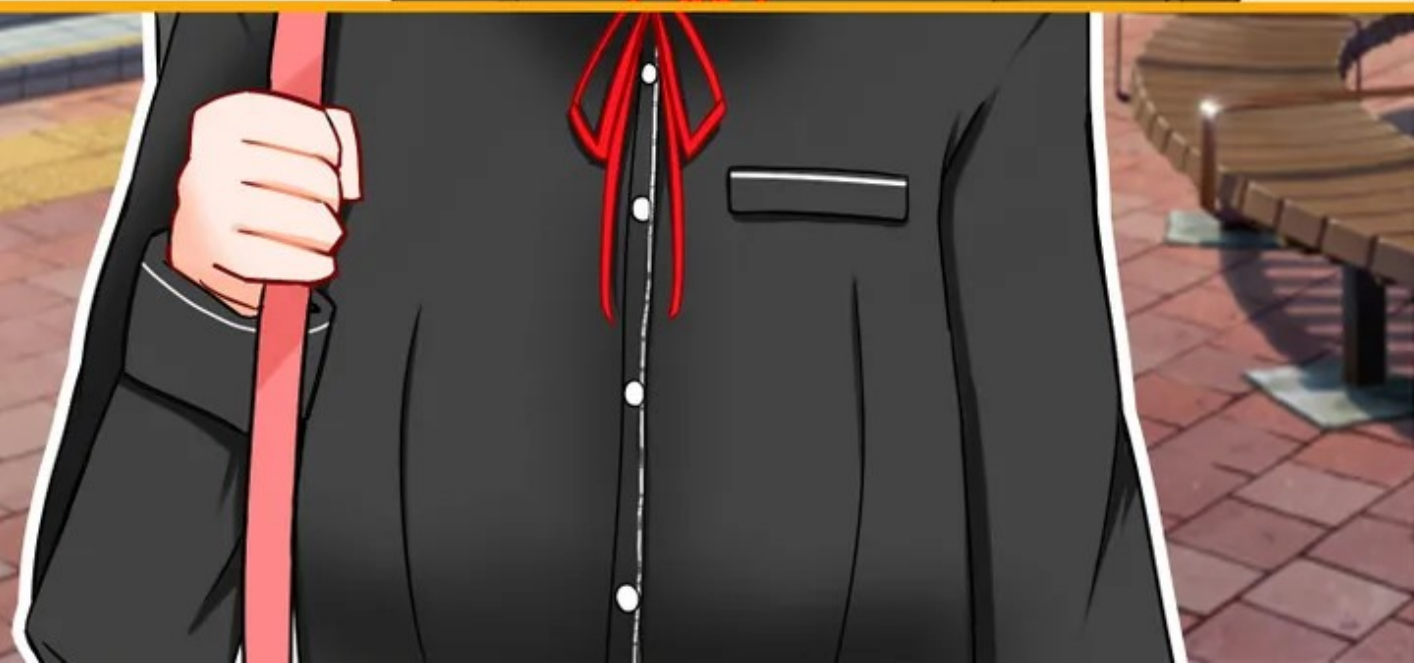
少女の激励と自信の気持ちを受け入れた
まあむからは、もう迷いは消え去っていた。

「ありがとうお姉ちゃん!

まあむお家に帰るねっ!!」

駆けだすまあむの背中を

少女は満足そうな笑みで送りだす。



「うん、どうしたの？」

屋近くになって、部屋でゴロゴロしつつ
スマホの画面に、娘のGPSの反応を見る。

公園に行ったり街をぶらぶらしたり
そして今は家に向かっていているようだった。

「まあむは照れ屋さんだからなあ…」

「まゆりは買い物に行っちゃったし
とりあえず謝って…」

バタバタとドアが開く音が聞こえたかと思つたら
まあむがそのまま俺の部屋に飛び込んできた。

「パパっ!!」

飛び込んでくるなり
服もパンツもサツサと脱いでしまった。

裸にお気に入りの縞々靴下だけ……
というちよっぴりマニアックな姿で
股間を見せつけるように俺の前に立つ。

「まあむ、パパとエッチする!!」

娘の回から飛び出た言葉に
全身に電撃が走ったような衝撃を受ける。

「まあむ……やっど……」

「やっどパパと気持ちを通じ合ったんだね」

「パパ、まあむの

おまんこ見て……?」

「おおっ……」

一緒にお風呂入ることもあるので
つるつるの一本すじのおまんこは
見慣れてはいるが……

こう、見せつけられると
また違った感慨がある。

つるんっ♡

とろ♡

とろ♡

「まあむのおまんこ、ヘンじゃない?

ママみたいに……ちゃんと

パパとエッチできるおまんこ?」

「うんうん、ママとそっくりの

ぴったり閉じてつるつる真っ白の

とってもエッチなおまんこだよ」

褒めてあげると
嬉しそうにパッと笑顔を浮かべる。

何で急に心変わりしたのかわからないが
素直な時は本当に可愛い娘だ。
いや、いつでも可愛いけどね。

「じゃ、じゃあ…：パパ

まあむとエッチしよ…：？

まあむのおまんこにも

おちんちんいれて欲しい…：」

「おう、じゃあ

まあむにも初めてのセックスしてあげるから
その前に準備をしような」

とろこ

とろこ



まあむのおまんこは
しっかりと愛液を垂らして
準備もできてるよんなのだよ...



「大丈夫か？まあむ」

とりあえずちんちんを濡らしてもらおう為に
目の前に出してみたら
まあむは躊躇いなく小さなお口で啜えてくれた。

「まむむみもむみま」

何か喋ってるが
ちんちんを啜えたままなので
全然わからない

「パパのおちんちん美味しい〜♡♡♡」

「もちゅちゅぱ…」

にゅあ…」

苦しい…

まゆりは美味しい美味しくて
しゃぶりまくってくれるんだが。

あむっ

あむ

「むむむちゅむちゅ

……ぱぱあ、おらんなら……」

「んほろ……」

啜えたまま喋られると
ちっちゃなお回がもごもご動いて
フェラの慣れなんて無くても
絶妙に気持ちいい……。

「うーん、まあむは

あんまりフェラ好きじゃないかあ」

とりあえずご機嫌取りに
優しく頭を撫でておく。

「ぶは……でもパパのだから嫌いじゃないよ
気持ち良くなってくれるの嬉しい……

……でもおらんなら……」

「も
ちゅ

「も
ちゅ

「それじゃあセックスするわけだけど
まあむもどんなことするかは
わかってるよな？」

「うん…おちんちんを
おまんこに刺して
せーえきぎ？を出すの」

うむ、その通り。

まあまゆりとのセックスを
よく見られてるしな。

「まあむもエッチで
パパと気持ち良くなりたいたい…」

まゆりの姿を見ているからだるうけど

「まあむ、処女ってわかるか？」



きゅっ♡

♡きゅっ♡

♡きゅっ♡



「わかんない……」

娘の大事な初めてをもらうので
処女の意味や価値を教えてあげると……

「じゃあ、しよじよまく……?を
あげた人だけで
エッチするってことか?」

うーん、意味は違うけど
なんか良い感じの勘違いなので
そう言うこととしておこう。

「まあむのおまんこが、パパ専用の
おまんこになるってことだけと……
まあむはそれでららっ」

きゅっ♡

♡ふっ♡

♡ふっ♡



「うん…パパならいいよ
まあむもママと一緒にになりたい」

「まあむう~~~~~♡

ああ、「可愛い娘を持つてよかった」

やっぱり父親としては是非にでも
娘の処女はもらわなければ。

「じゃあ、まあむの可愛い処女おまんこ
パパがもらってあげるね」

「うん…まあむのしよじよまく?
パパのおちんちんで
やぶって…♡♡」

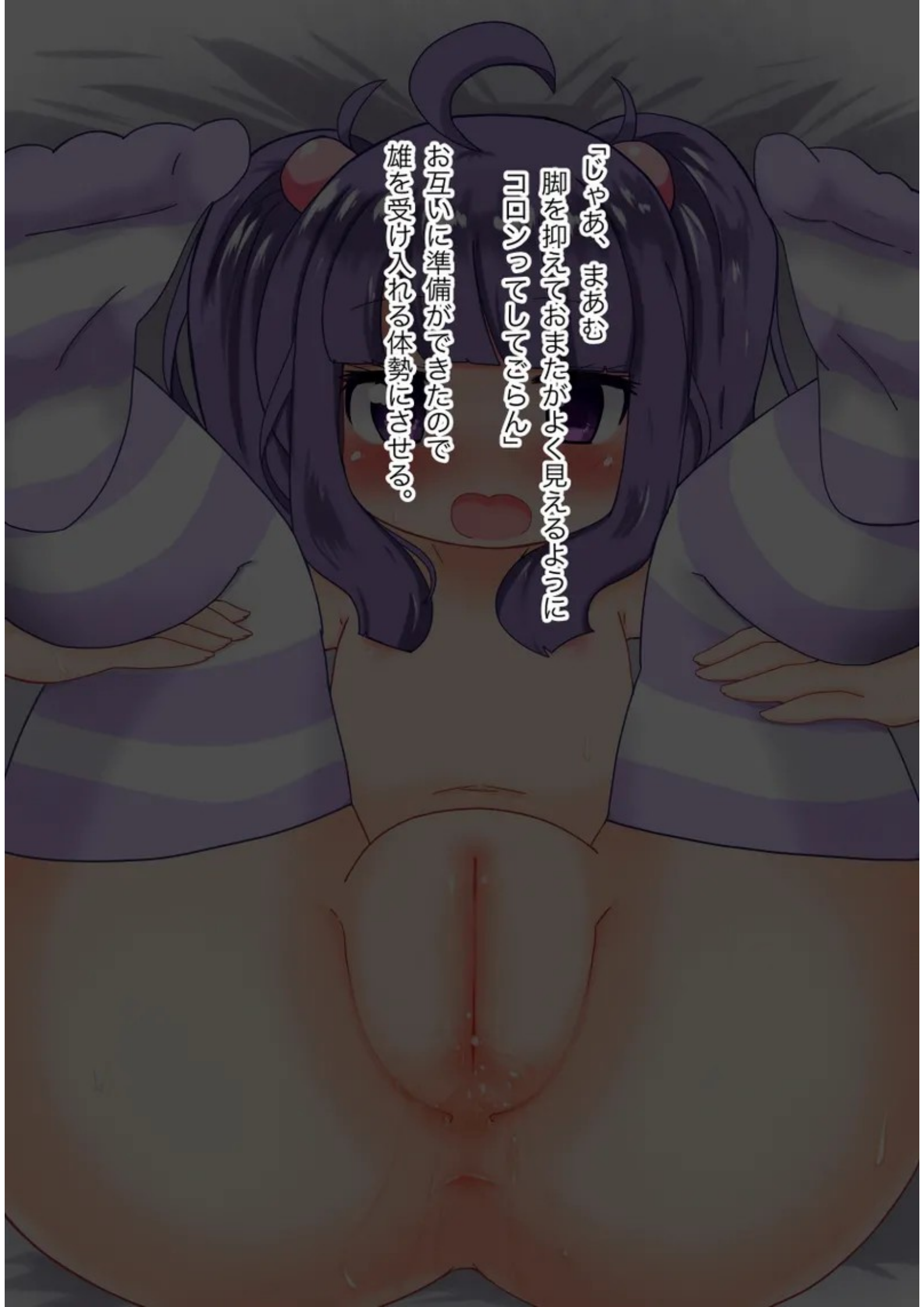
キゅっ♡

キゅっ♡

キゅっ♡

キゅっ♡





「じゃあ、まあむ

脚を抑えておまたがよく見えるように
「ロンっつっつてらん」

お互いに準備ができたので
雄を受け入れる体勢にさせる。

「じゃあ教えた通りに
言っただらァン？」

「え、えっと…」

まあむのつるつる処女おまんこに
パパのおちんちんを入れて…」

っ
っ

「いっぱい種付け中出し射精して
まあむの新品おまんこを
パパの専用おまんこにしてください…♡」

…生きててよかった。
娘にこんなこと言ってもらえるなんて

どき

どき

かっ

ばっ♡

「じゃあ、まあむの処女まんこ
パパがもらうからな……っ」

まゆりと初めてセックスした時よりも
更につきつく狭そうな娘の雌の部分……
ガチガチに勃起したモノを
甘く濡れた割れ目に滑らせる。

「最初だけチクつとするかもしれないけど
すぐに気持ち良くなるからな」

「う、うんっ……
パパのこと信じる……」

んん

どき

どき



ゆっくりしても痛そうなので
一気に突き入れると
意外とすんなり奥まで入る。

子宮口に当たる感触と同時に
まあむが嬌声をげた。

ん
あ
っ
♡

ズ

♡
♡
♡

♡
♡



「パパあつ……」

「おまんこ……熱いつよお……♡」

「やはり処女喪失で痛いのか
細めた目に涙がじわーっと溜まっていく。」

「あぁ……っ」

「待って待って、一回抜くから……」

「そーいって体を起こそうとする……」

「みちゅ♡」

「みちゅ♡♡」

!?

ふあふあ
あふあふ
あふあふ
あふあふ

あふあふ
あふあふ
あふあふ

あふあふ
あふあふ
あふあふ

(えっ、まあむいってると?)

小さな体を震わせて
膣内が痛い程に激しく収縮する。

(破瓜イキ!?)

実際にあるの?)



「ぱぱあ…ぱっ…」

おなか、熱いよお…っ♡」

「それは気持ちいいって証拠だよ
おまんこ気持ちいいって言うてごらん」

「きもちさ…♡」

「おまんこきもちささっ♡♡」

戸惑いながらも初めての快感に
すっかり身を蕩かしているようだ。
これなら結構ガツツリヤっちやっつても…

「じゃあ、まあむ

まあむの娘処女まんこ思いつきり
ずぼすぼしてあげるからな♡」

「ギョラリッ…♡」

「おおっ♥娘まんこ締まるっ…
奥までしっかり愛液たっぷりなのは
ママそっくりだなあ」

「パパっ♥おちんちんがつ♥
おまんこ♥おまんこお…♥」

うんうん、気持ち良くなると
まんこまんこ言っつのもまゆりそっくり

「もっと♥もっとエッチしてっ♥
もっとまあむの娘おまんこ
気持ち良くしてえっ♥♥」

あま
♡

あま
♡

ズ
ン
♡

ズ
ン
♡

「あひつ♡ぱぱ♡」

「エッチきもちいよお♡もつと…」

「もつと早くしてればよかったあ♡」

「もつと早くつ、無理矢理にでも」

「まあむにおちんちん入れてくれば」

「よかったのに…♡♡♡」

「流石は俺とまゆりの娘…」

「初めてで感じるどころか」

「軽いアへ顔になってきてるし」

「もつともつと」

「処女おまんこきもちよくしてっ♡」

「パパも気持ち良くなってっ♡」

「あま♡」

「あま♡」

ズン♡

ズン♡

「でも、まあむ。まあむの処女まんこが
とっても気持ちいいから
パパもうそろそろ射精そうだよ」

「でも？ママがすっぴん嬉しそうなの？
まあむのおまんこにも
びゅっびゅっびゅっって♡♡♡」

「うんっ♡ママが大好きな精子を
娘まんこの処女子宮にもたっぷり中出しして
パパの専用まんこだって教え込んでやるからなっ!!」

「うんっ教えて♡まあむのおまんこ
パパの専用おまんこにしちゃって♡♡♡」

「娘の処女まんこに
射精すぞっ・・・!!」

あゝ♡

あゝ♡

キュン

キュン

ズンッ♡

ズン♡

「あ~~~~っ射精した射精した♥」

まあものまんこから、ずるっと引き抜くと
小さな子宮では受け止めきれなかった精液が
音を立てて溢れ出る。

「パパあ……♥♥♥」

「もっともっとエッチしたいよお♥」

ニッコリ

「うんうん、これから毎日するからな♥」

まあむのおまんこに、パパのおちんちんが
入らない日はこれから無いからな♥」

「うん……嬉しい♥♥♥」

ゴロ

ぽんぽん

「もつと早くエッチしちゃえば良かったあ
おちんちんこんなに気持ちいいなんて♡」

お互いの体液でベタベタになった小さな体を
まあむが擦り寄せてくる。

「あのお姉ちゃんのおかげだなあ……」

……なんかサラッと聞こえたけど
いきなり心変わりしておかしいな……とは
思ったんだけど

「もしかして、頭にヘンなの乗せた
黒髪のちっちゃいやツか？」

「う、うん……パパも知り合いな？
ママのこと知ってたし……」

うーん、まゆり然りまあむ然り
俺の人生においてあの壺売りの少女の行動は
全て結果オーライっっちゃオーライなのだが……

「い、いや……」

怪しすぎて怖いけど

御利益ありそうなのでこれくらいはフオーロ〜ンだ。
座敷童みたいだしな、見た目も。

あの壺売りの子だけは
壺にどれだけ願っても

俺の目の前に二度と現れることは無かったからな――

なんて考えつつ、まあむを抱いたまま眠りについた。

「おはようさー」

「おはようさー、起きようよさー」

「……」

モヤッ

「はい♥お兄さん♥

ほらほら起きて起きて」

不思議なキラキラ空間で

全ての発端、壺売りの少女が

俺にまんこを見せてつけている…。

「夢か…」

「あい、夢です♥

お察しが早くて助かります♥♥

「もしかしてキミとも

エッチできる流れ？」



「エッチは無しです

私、おちんちはNGですので…

あとここ、おまけみたいなもんですし」

「おおう、残念

まんこ見せに来ただけ？」

「そう言いながら自分の息子に握り

上下に擦る。

「見せに来ただけ？つて…

おまんこ好きでしょ？つるつるの」

「うんうん、だから今

おかずにさせてもらってます」

わんわんわんわん…

わんわんわんわん



「本当はダメなんですけどね
エッチNGなんで、でもまあ
幸せそうだしサービスがてら…」

「うんうん、やっぱりいいなあ
パイパンまんこ、好き」

「聞いてます？」

「んー、聞いている聞いてる
おっ、ぴったり閉じたすじエロくて
もう精子射精そうっ」

「聞いてないですね
コレ、結構なサービスなんですよ？
タダですし」



「本来ならこういう」

謎の光が入る予定で……」

「そろそろのいいから!!」

もう射精るから光どけて!!」



「えっ、えっ」

っ

これ

これ

「光どけてパイパン見せるっ!!」

っっっ、射精るっっっっっ!!」

ミャー♡♡♡



ん
ん
ん

ん
ん
ん

ん
ん
ん
ん
ん

「ふーっ、すっきりすっきり

夢でも射精って気持ちいいんだな」

「おいおいいきなりだなあ…」

んあー、つか精液って本物こんなのか」

「えっ、さっきまでの

営業スマイルは？」

「問答無用で精液かけてくるやつに

んなもんねーよ、あーえんがちよ」

「夢の中までわざわざ

まんこ見せに来る奴に言われたくねえ…」



「てかお前も処女かよ」

「当たり前だろ、そんなことする

相手がいりゃ、壺なんか売って

生計立ててねーよ」

「じゃあ俺がまた今度

買ってやるよ、壺でもなんでも」

「壺界はパイパン処女じかないの？

どうなってんの？」

「女はみんなパイパンで処女の方が

かわいーだろうが、異論あんのか」

「いや、無いけど」



「あ、これ夢から覚める感じが」

「んじや、現実では営業スマイルしてやるよ
壺買うつつたんだから忘れんなよ」

「おはよう、おはよう、おはよう」



///

ボタ

ボタ

ボタ

ボタ

翌日。。

「いねえなあ

やっぱ夢は夢か」

ガツカリ半分安心半分。。
立ち去ろうとしたその時

「壺、壺ですよーっ♡

幸せになれる壺、今なら5万円ですす!!」

背後から聞き覚えのある声が

聞き覚えの無い値段を要求している

振り返ると。。

「おにーさん壺買ってー♥」

。。。。

声は似てるが姿は違う。

胸があるし。

「誰？」

「初めまして〜」

「なんなのキミ達…」

似たようなのがいっぱいいるの？」

「おにーさんが何言ってるのか

わかりませんが〜」



「人生広げたくないですか？
幸せな人生を更に、更に都合の良い人生に♡」

なにこの、ステップ2に入った感じ。

「こっやって俺は壺界とやらに
生涯搾り取られて行くのか…」

「5万円です♡♡」

「…買います」

対価は人生で証明済みだ。

悪くない。



みんなも街で怪しい壺売りを見かけたら

絶対に買おっね!!



3-A

おわり